
ルイナー座へようこそ！

花梨糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルイン一座へようこそ！

【Nコード】

N3084U

【作者名】

花梨糖

【あらすじ】

普通に生まれ普通に過ごしてきた一般人レイラはある日迷い込んだルイン一座の秘密を見たため決めつけられ奴隷宣言をされる。胡散臭い団長、嫌味な副団長、無口な用心棒、乱暴な猛獣使い、無邪気な少年……彼らと過ごすうちにレイラの心に変化が訪れる。逆八ーだけどあまり甘くないかもしれません(?)

晴天・いつもの日差し

「次の街はどうなるだろうな。楽しみだ」

サーカスの長である彼は馬車に揺られながら呟いた。

隣で丸まっている紫猫はそれに同意するかのようになやーと一鳴きする。

サーカス、それは見るものを娯楽へと導く。

一時の夢に深入りしたら最後、二度と出ることは叶わない。

「お前たち！ 久々の開演だ！ 張り切ってくぞ！」

団長兼道化師の彼は高らかに笑う。これから起こる喜劇を予言するかのよう。

ここ、エルレアトスは巨大な領地を保有する国家で良政を敷いていると評判だ。

肥沃な土壌、過ごしやすい気候に恵まれ世界中の人間が集まる。

最近では旅芸人や一座などが流行し娯楽の要にもなっていた。

エルレアトスのある街、カーリエにも人気のサーカスが訪れようとしていた……。

「うーん、いい天気！ 絶好の洗濯日和ね！」

私は洗濯物を干しながら得意の歌を歌っていた。小さい頃から歌

だけは評価されているのだがそれ以外は平凡。平凡な一般市民の私。それでもいい、幸せなのだから。

長い茜色の髪をかきあげ空を見上げる。雲ひとつない晴天。

「レイラー？ おっ、いたいた」

私の名を呼ぶのは幼馴染のジーン・オリオール。絵に描いたような好青年で最近はお女の子にモテモテだと聞いた。

しかし、告白されても全部断っているそう。今のところ彼女なし。もったいないなあといつも思ってしまう。

短い黒髪に少し低めの背。どこか抜けている性格は母性本能をくすぐる。

「どうしたの、ジーン。何か用？」

「用っていうかさ、サーカスが来んだよ！ あの有名なルイン一座」

ああ、と納得する。ルイン一座とは新しくできたサーカスらしく演目の出来や美男美女の団員で評価を高めている。一度は観てみたいと少し前にジーンやおばさんと話したものだ。

「お前……その、観たいって言ってたろ。だから……その」

「そうねー、でも料金高そうだし。そんな無駄遣いはできないわ」

「お、オフクロが金出してくれるってよ。お前いつもがんばってるし……」

「やあね、おばさんにそんな迷惑かけられないわよ。それよりこれから私部屋の掃除しようと思って」

「お、俺が稼いだ金で連れてってやつても」

「そんなことに大事なお給料使わないの。そうね……女の子とデートのときに使うとか！ せっかくモテるんだから」

するとジーンは打ちのめされたようにとぼとぼと家の中に入ってしまった。何かいけないことでも言ったのだろうか。

「俺が女とどっか行くわけないだろ……どんだけ鈍いんだ……」

ブツブツと何か言いながらその場から去るジーンに少しだけ罪悪感を抱く。

私は幼い頃に両親を事故でなくしている。ジーンのお母さんであるマリーおばさんが両親と親しかったらしくほかに身内がない私はこの家に引き取られた。

迷惑をかけないようバイトもしているし家事もできるだけ手伝っている。それでも後ろめたさは消えない。

早めに自立して恩返しをしなければと常々思っているのだがいかんせん、男性優位なこの社会で女が就職するのはなかなか大変なのだ。

基本、女性は結婚するのが当たり前でそれ以外は自ら商売をして成功するか体売るかしない限り安定した収入は得られない。現在しているウエイトレスのバイトも賃金あまりよくないので安定のある稼ぎ方ではないのだ。

体を売ろうものならジーンを初めとしたオリオール一家にお説教を食らってしまう。

商売で成功するのも賭けに近いものだ。まず普通に自滅する。

となると結婚なのだが正直、恩返しできるのか不安である。そもそも結婚できる自信がない。

そんな先が思いやられることを考えながら一度部屋に戻ることにした。

あまり物が無い部屋とよく言われるがお世話になってる分際で必要以上に物を置くのもどうかかと思えば必要最低限にとどめている。

落ちていた小物を小物入れに入れようと蓋をあけると母親の形見であるペンダントが久しぶりに目に入った。

『レイラ、これはね、あなたのお父さんがあなたのお母さんに贈った思い出のペンダントなのよ。お母さん似のあなたならきつと似合うわ』

先日の十七歳の誕生日のときにおばさんから渡されたのだがまだ一度も身に付けたことはない。

だって似合うわけないもの。

青い宝石は雫のような形で神秘的だ。私の髪はお父さん譲りの茜色。絶対に合わない。

そんなことを考えていると美しい紫色の毛並みを持つ猫がいつの間にか窓辺にいた。

見たこともない綺麗な猫だ。紫色という時点でありえないだろうが神秘的な雰囲気を漂わせており猫らしくないとすら思った。猫の頭をそつと撫でてやると嬉しそうにごろごろと鳴く。

「どこから来たの？ そういえばルイン一座がきてるんだっけ。その子？」

猫に人間の言葉なんて伝わるはずもないのに話しかけてみる。

すると机の上に置いておいたペンダントに飛びつきそのままくわえて外に逃げていった。

「ちよつと……！ 待ちなさい！」

さすがに窓からは無理なので普通に階段を降りて猫の向かった方向にひたすら走る。

目立つ猫なので見失うことはなかったが走ってる最中からあった違和感に気づいた。

私が見失わない程度の距離を保ち時々止まったりしているのだ。

なんて頭のいい猫だ。すぐ舐められている感じがして思わずムカツとした。

いつもと変わらない街並み。走る猫。追いかける私。

普通の日常だとこの時までには当たり前前のように思っていた。

晴天・いつもの日差し（後書き）

逆ハーに挑戦してみたくて試しに。お気軽に感想などいただけると嬉しいです。ちなみにまだ逆ハーにはならないです（笑）

迷い込んだ先は

「はあ、はあ……待ち、なさいっ……！」

ようやく追いついたが乱れた呼吸のせいでうまく喋れない。

いちかばちか猫に飛びかかりしっかりと抱きしめる。

猫は最初こそばたばたと暴れていたがすぐに大人しくなりくわえていたペンダントを落とした。

「もうっ！ どれだけ人をおちよくって……あれ？」

落ち着いて周りを見渡すと見慣れない不思議な場所だった。色彩感覚が狂っているような装飾。

なぜ気付かなかったのかと疑問にすら思う場所のと真ん中にいた。しかし街にこんな場所は存在しない。

「もしかして……ルイン一座？」

派手な装飾。テントのような仮設住宅。

となると本当にこの猫はルイン一座の猫だったのか。確かに珍しい猫だし異国から、というのだったとありえる。

「舞台裏かな……早く出ないと怒られちゃう」

どちらが家なのかさっぱりわからないがとりあえず出なければまずい。

辺りをきよろきよろと見回すとある一つのテントがやけに気になった。

惹かれる何かがあるわけではないのに思わず近寄りたくなる、そんな奇妙な感覚が私の足を動かした。

少しだけ、少しだけ……。

テントの裾を掴みそつと持ち上げる。時間の流れが遅く感じた。

テントをそつと覗き込むその瞬間

ひんやりとした物が首筋に当てられていた。

思わずその感触に驚きテントの裾を落とす。

経験したことはないがそれが一体何か、視界の隅に映ったおかげで分かってしまった。

剣。ジーンが時々訓練で剣を持ち出すときに見たことがあった。

「ここで何をしている」

低い、感情があまり感じられない声。

振り向こうと思っても剣の恐怖で振り向けなかった。

「誰だか知らないが侵入者は」

「おい、ヘル……って何してんだ？」

少し離れたところから男の人の声がすると近づいてくるような足音がした。

「女の子じゃんか。何、お前連れ込んだ？」

「馬鹿か。侵入者だ」

「マジ？ どっから入ったんだろうな。それはともかくとしていきなり殺すのはやめようぜ」

「一応理由を聞いておこうか」

「可愛かったり美人だったらもつたいないじゃん！」

二人の応酬を聞いていると今なら逃げられるんじゃないかと考えたが変に動いたらまずいささりやられかねないだろう。いつの間にか剣は下ろされていたので恐る恐る振り返る。

そこに居たのは二人の美形男子。

剣を持っている方は黒を基調とした服で髪も黒。ジーンも黒ではあるがまた少し違う感じがする。ジーンが普通の黒ならばこの人は漆黒といった感じだ。

隙がない眼差しにすらっとした体つき。恐らく十人中十人が美形だと判断するくらいかっこいい。

もう一人は全体的に派手な印象で癖がある金髪も派手さを強調していた。

大人っぽいような子供っぽいような不思議な感じがする容姿は恐らく女子から人気がありそうだ。少し軽そうな印象があるが瞳は鋭く獲物を狙う獣のようだ。

黒いほうが冷静な犬だとしたらこちらは獰猛な狼といった感じだ。

「秘密を知られたなまずいだろう。即刻始末を」

「頭固いつて。俺なら一回くらいやってからだな」

「お前は一回地獄に落ちろ」

「ちよ、親友に向かってそれはひどいだろ」

「親友？ お前と俺がか？ 寝言は寝てから言っただな」

……これ逃げてもいいのかな。だんだん話が逸れてる気がしてならない。

一歩一歩、気づかれないように距離を取る。そして一気に駆け出した。

「なっ」

「おー、逃げたな」

後ろで何か聞こえたが構っていられない。猫を追いかけていたときよりも早く走らなければ、一刻も早くここから逃げなければ。

しかし、角を曲がるうとして誰かとぶつかりその場で転んでしまっ。

急いで立ち上がりその場から逃げようとする強く腕をつかまれる。

体が引き寄せられ目と目が合う。

先ほどの二人のせいだろうか。やけに普通の青年に見えた。

顔の造形は整っており美形ではある。しかしまともというか普通という印象が先駆けたのはやはり先程の濃すぎる二人のせいだと思う。

銀色の髪は微妙な長さで適当にまとめておりかっこいいのには

り普通という印象が抜けない。

「お嬢さん、こんなところで何してるんだ？」

優しそうな声で囁いてくる。甘い香りが漂いくらぐらしそうだ。

そこで私は逃げていることを思い出し手を振り払おうともがく。

そんな私の行動に呆れるかのように青年ははあ……と息を吐く。

「まあここにいてるってことは侵入者かな。うーん、顔は悪くないけど微妙に好みじゃないな……」

「ちょっと、離してくださいっ！」

なんか少しむかつく。でもそんなこと気にしてられない。

しかし異常なまでに強くつかまれた腕はどうやっても振り払えない。

「まあいいか。とりあえず捕獲」

その一言を聞いた途端視界がぐにやりと歪んだ。

水の波紋が広がって消える。そんな光景が浮かび 私は暗闇に落ちる感覚に囚われた。

「モノ、そつちに侵入者が なんだ、捕まえてくれたのか」

「見つけたのに何逃がしてるんだヘル。相変わらず役たたずだな。

まあ期待はしてないさ」

素晴らしいほどの笑顔で罵倒を浴びせるモノという青年。

レイラを乱暴に抱えているとヘルは微妙な表情を浮かべる。

「とりあえず始末するんだろう。俺が見つけたから俺がする」

「一度取り逃がしたお前に任せられないね。そもそもせつかくの上玉だし団長の判断を仰ぐことにする」

「え、じゃあ一発俺やってもいい」

「黙れこの万年発情期。そのへんのネズミにでも欲情してる」

金髪の青年の言葉をモノは一蹴し意味ありげに笑った。

犬よりも狼よりも鋭く、獲物を齧るような瞳で。

「面白くなりそうじゃないか」

まもなく始まるサーカス。それはひとときの夢。そして、永遠の

迷い込んだ先は（後書き）

どうもです。とりあえず下品で　ごめんなさい（笑）　逆ハ
なのですが最終的にくつつく相手は意見聴きながらできたらしいな
あーか思ってます。時々アンケートをとるかもしれないです

ようこそ、お嬢さん

あれ、私どうしたんだっけ……。

うまく回らない頭を必死に動かし自分の身に起こったことを思い出す。

よくわかんないけどいきなり意識が遠のいて……。

とりあえず猫、あの猫のせいだ。全てあいつが悪い。

沈んでいくような浮くような奇妙な感覚。

自分でも馬鹿みたいなこと考えてるなとは思ったが本当にそんな感じなのだ。

寝てる、の……？ 私……。

それじゃあ起きないと。早く起きて逃げないと。

……逃げるって何から？

無意味な問いを自分に投げかける。

わからない。そもそも私は何をしてたんだろう。猫？ サーカス？

駄目だ、何も思い出せない、考えられないよ。

すべてを投げ出してこのまま自分を止めてしまいたい。

ふわふわと心地よく過ごせる今が今までになく安らぎを与えてく

れる。

『 気持ちよくなってるどころ悪いけどお嬢さん、そろそろ起きて』

誰？

突如頭に直接語りかけてくるような声が響き僅かに驚く。
声の主は落ち着きのある優しそうな口調で言った。

『とりあえず起きればわかるさ。さあ、起きて』

どうやって？

起きろと言われてもそれすらわからない。まぶたを開く方法も腕を動かす方法もわからないのに。
すると声の主は呆れたようにため息をついた。

『はあ……仕方ない』

その言葉と同時に鈴がなるような透き通った音が鳴り響いた。
そして、私の意識も次第にはつきりしていき。

「ん……あれ……？」

「あ、起きた」

超至近距離に先ほどの銀髪の青年の顔があった。
しばらく沈黙。

「ぎゃあああああああああ！！」

「えっ、おわっ!?!」

私は思わず青年を思い切り殴ってしまった。

予想だにしてなかったためか青年はよけることができずもろに喰らってしまった。

頬をおさえ痛そうにしている青年をまじまじと見つめ気づいた。

先ほどとは違う場所、テントの中のような場所だった。

何やら体に違和感があるがそれが何なのか、それよりも今自分が置かれている状況が気になった。

「グーで殴ったよ、このお嬢さん……いったー……」

少しだけ赤くなっただ頬がチラリと見えなぜか悪いと思ってしまった。

そして僅かに抱いた違和感の正体に気づいてしまった。

青年の手に握られた鎖。そしてその鎖の先は

枷がはめられた私の足だった。

「っ!?!? ちょ、これ! 何ですか!?!」

足首にはめられた枷は青年が持っている鎖が繋がっている。

「ん? 足枷。鉄でできた拘束具で罪人などの動きを封じるもの。

割と裏で回ってるやつは単価安いよ」

「そ、そういうことじゃなくて何でこんなことに……」

「お嬢さんが悪い子だから」

満面の笑みでそう言われ愕然とする。悪いことなんてしていない。迷い込んだのは迷惑かもしれないけどここまでされるいわれはないはずだ。

動いたびにじゃらつと鎖の音がして現実だということを実感させられる。

「本当は殺すのが手っ取り早いんだけどね。顔悪くないし今検討中。

よかったね、お嬢さん」

「何言つて……」

「おーい、モノ……つて起きたんだ」

テントの中に入ってきたまた別の男。青い髪に地味な服装。これといって目立つものはあまりない。年齢は二十代くらいだろう。少しあどけなさがあるが十分大人の雰囲気がある。

男の人は私をじろじろと観察し納得がいった顔で言った。

「うん、まあ悪くないけど気強そうだし面倒そうだね。ああでもそういう趣味の奴はいくらでもいるし……」

「悩んでないでちゃっちゃと決めてくださいクラウン様」

「団長に口出しするな……。……うーん、てかしばらく売りにいけなさそうだから殺すしかないんだよな……。ああ、でも」

この人がルイン一座の団長！？と思わず場違いな驚きを隠せなかったがそれよりも驚かされることが起こる。

いきなり顔を近づけてくると顎を掴み見つめ合うような感じにさせられた。

「君、死ぬか生きるか選べるならどっちがいい？」

いきなり生き死にの選択を求められた。

普通に死にたくないです。

「い、生きたいです」

「よし、今の言葉に二言は許されないよ」

暗く唾う男は背後から一枚の紙を取り出す。そこに書かれていた文字は私の読める字ではなく古い文字かなにかのようだった。

「『私はこのルイン一座に生涯奴隷として過ごすことを誓います。逃げも隠れもしません。』はい、契約完了」

その言葉と同時に紙が淡く光る。

超常現象にも驚いたがそれよりも契約とやらの内容に驚かされた。

「け、契約！？ 奴隷！？ な、なんで……！」

「理解力ないなあ……生きたいんでしょ？ 本来なら殺してるところなのに生かしてもらってるんだよ？ だから生涯かけて恩義返す

もんでしょ。まあ逃げられないようにってのもあるし。ちなみに契約を無視しようとしたら契約の掟によって罰がくだるから。痛いのがやだよな？」

早口で告げられる内容は絶望しかない。どうしてそうなったのだ。「わ、私契約するなんて言ってます！ そんな契約無効です！！」
「黙れ、ガキ」

ドスのきいた声で詰め寄られ、殴られた。殴られたときのことがわからない。頬に残る痛みは間違いないがまったく見えなかった。

「ここに迷い込んだ自分を呪うんだな。破滅を意味するルイン一座普通の人間が迷い込んだら最後、生きて出られない。それなのに生きられることに感謝をするんだな」

それだけ言い残しその場から去った。
いまいち現実を受け入れられない私に優しく声をかけてきたのは銀髪の青年だった。

「まあ、生きれるだけよかったと思っておきなよ」
「な、なんで……私、誰にも言いません……。何も変なの見てないし……」

「疑われることだけで十分罪なんだよ。運が悪かったと割り切るんだね」

青年は私の頭を撫でるととても優しくそうには見えない意地の悪い笑みを浮かべた。
すると私はまたしても暗闇に落ちるような感覚に囚われまぶたを閉じてしまった。

「ルイン一座へようこそ、お嬢さん」

最後に聞こえた青年の声は暗闇に飲まれ消えてしまった。

ようこそ、お嬢さん（後書き）

本格始動します！これから更新ペースどうなることやら……。応援
お願いします！

可笑しな団員

夢だったらどんなによかっただろう。

悪夢であつてくれと願つたことは現実でしかなかった。

「うう……何この量の洗濯……今日中に終わるの……？」

「終わるのじゃなくて終わらせるんだよ、お嬢さん。うちの団員はすぐに服を汚すから困つたものだよ」

私が洗濯物と格闘している後ろで銀髪の青年　モノ・ポリーさんは優雅にお茶を楽しんでいた。

「見てないで手伝つてくれたつていいじゃないですか！　一人じゃ無理だつてわかつてるくせに！」

「手伝う？　私が君を？　冗談は顔だけにしておくんだね。私は君の見張りをするのが仕事なんだ、し・ご・と。つまりやりもせず無理だ無理だと文句を言う君みたいな墮落した若者とは違つてちゃんとした仕事をこなしているんだ。ついでに言つと私は普段この一座の副団長代理という立場であつて部下や下働きの様子を監視することとはとても重要なことなんだ。もちろん君が逃げたり馬鹿なことを考えなければこういう余計な仕事が増えないというのにそれを棚にあげて人に当り散らすとは……嘆かわしい。それに洗濯物の仕事はつい先日まで一人でこなしていた奴がいたんだ。やるうと思えばできるんだよ。やる前から結果を考えているから成果が出ないんだよ。つまり、君は自分の無力さを棚に上げて私に当り散らし文句を言う現代の若者の鏡ということなのだよ」

長い。嫌味言うだけでこんなに長い。

あの日、勝手に契約とやらをさせられた時、意識を失つたあと、目が覚めたら五日も過ぎていた。

カーリエからとつくに立出しており一度逃げようとしたのだがこごとくこのモノと名乗る青年に阻まれた。

なんでもしばらくの間見張り役を任されたらしく基本つきつきりだ。

そしてこういった雑用を時々任されるのだが手伝うどころか高みの見物といった感じで私のことを嘲笑っている。

そして、嫌味がこの上なく鬱陶しい。

そんなこんなで目覚めた日から三日たったのだがこの嫌味だけは慣れない。

ジーンこういうときは頼んでもいないのにしょっちゅう手伝ってくれていた。今思えばジーンはいい奴だったんだと痛感した。もちろん、もう会えないだろうが。

ジーンやおばさんはきつと心配しているだろう。それこそ道に迷って夜にボロボロのなりで帰った日には卒倒されたくらいだ。逆に心配症すぎて少し面倒と思ったこともある。

それなのに五日近く何も言わずに消えたとなればおばさんなんかは心配通り越して倒れてしまいそうだ。

せめて別れる前に何か言っておくんだった。こんな形で別れるなんて最悪だ。

「帰りたい……」

思わず漏らした呟きにモノさんは反応した。

「ほら、愚痴ってる暇があったらきりきり働きなさい。お嬢さんだつて痛い思いはしたくないでしょう。まったく、これだから田舎の娘は……」

「もう！　なんでそんなに嫌味つばいんですか！　ていうかお嬢さんつていうのやめてください。子供みたいじゃないですか」

お嬢さんじゃなくてお嬢ちゃんつて言われてたら多分今よりも怒っていたがまだマシだったのでそこまで怒りはなかった。

「お嬢さんにお嬢さんと言って何が悪い。実に的確かつ分かりやすい呼称だと思うけれどね。そうやって自分に対する呼称に文句をつ

けるのは自分でそう呼ばれたくない、もしくは認めているがゆえに反発するのどちらかだと思っただが。まあお嬢さんの場合はどちらもなのだろう。それに、お嬢さんはまだ十代だろう？ 私の見立てではざっと十六から十八だと思っただが……」

「十七です！ あなたはきつともものすごいおじさんなんですネ、そんな風に子供扱いして！」

「残念ながら私は現在二十一歳だお嬢さんとは四つ違いだな」

意外と若いことに少し驚いた。てっきり口調とか雰囲気的に二十代後半とかだと思っていた。

するとモノさんは不愉快そうに顔を歪めた。

「お嬢さん、もしかして私のことを二十代後半とか思ってたりのかい？」

心を読んだのかと思うくらい的確な突っ込みに思わずひるんだ。

しかし自分に偶然だと言いつき聞かせ落ち着きを取り戻す。

「さあ。私の考えなんてどうでもいいじゃないですか。ここでは私はただの雑用をこなすだけの奴隷でしょう」

嫌味を込めて言うとモノさんは私の本心を探るような目で見てくる。

なぜかドキツとしてしまったが顔が無駄にいいせいだと思う。普通っぽいのに顔はいいこの矛盾。

互いに無言で睨み合う。そんな時間が一瞬なのかとても長い時間なのか定かではないがある声にその空気は粉碎された。

「おい、モノー！ 団長が呼んでるぞー……っっておお、例の子か！」

軽薄そうな、先日出くわした金髪の青年。

品定めするような視線に思わず苛立ちを感じてしまう。

「あ、俺ウォルな！ ながーい付き合いになるだろうしよろしくなっ！ あと名前は呼び捨てでいいからな！」

長い付き合いになりたくないんですけど。子供っぽい笑みを浮かべられるとちょっと反応に困る。

しかも対等ではない関係なのにどうよろしくしろというのだ。すると笑みを浮かべたまま右手を差し出してきた。

普通に考えれば握手を求めているんだろう。いやだからどうしろと。

見れば見るほど大人の顔立ちなのに子供の雰囲気醸し出しているなんとも言えない青年だ。

おそろおそろ手を出し握手をしようとして触れる寸前、ウォルが視界から消えた。

かわりにすぐ近くに黒髪の青年が立っていた。私を殺そうとした、恐ろしい人。

驚いて辺りを見回すとなぜか数メートル離れたところでウォルが倒れていた。

「油断したらすぐこれだ……おい、ヘル。いくらなんでも吹っ飛ばしすぎだ。何か壊したらどうする。ついでにお嬢さん驚かすな、面倒だから」

「手加減はした」

数メートル程先に大の男を吹っ飛ばせるのを手加減と呼ぶのだろうか。もはや本気の域のような気がしてならない。

ウォルは頭をぶつけたのか頭を押さえながら立ち上がる。

「おい、ヘル！ いきなり蹴るんじゃないよ！ 危うく怪我するところだったじゃねーか！」

今ので怪我してないの、という突っ込みは心の中に留めた。きつとこの人に何言っても無駄だ。常識は通用しない。

ヘルと呼ばれた男は小さくため息をつく。

「お前のことだからあわよくば『味見』とか考えてたのだろう。純粹な握手を求めるお前は鳥肌以外の何ものでもない」

「確かに。下心あるとしか見えなくらいだったよね。まあ面白いから放っておいたけど」

この人たちの会話はよくわかんない。心の底から思う。わかんなくていいけど。

「くそ〜どいつもこいつも……俺は団長とか腹黒副団長とかにこき使われているかわいそうな女の子を慰めてあげよう」と

「お前の慰めはまた違うだろうこの年中発情期男。とっととそこらへんの湖なり川なりとりあえず飛び込んで溺れる。そして死ぬ死ね」

「何で今最後二回死ねって言ったんだよ!? 何でモノはそんなに辛口なんだよ! 俺の何が気に食わないんだよ」

「明らかに万年発情期なところと軽薄かつ厚顔無恥で愚鈍なところだろ」

「いや私はそこまで思っ
てないよ……」

……ついていけない。洗濯の続きしよう。

この数日で私の感覚色々狂った気がしてならない。

嫌味つたらしいモノさん。

ちよつとよくわからない青年ウォル。

相変わらず怖いヘルさん。

これからこの人たちと一緒になんて考えるだけで恐ろしい。ついでに言つとあの鬼畜団長がいるのだ。

ちなみにあの人の名はクラウンというらしい。偽名であるが。モノさんに本名をそれとなく聞いてみたら嫌味をたっぷり込めて言われた。

この一座でも団長の本名を知る者はほばいないらしくモノさんも知らないらしい。

鬼畜団長クラウン、名の通り道化師の役割を持っているという。

おどけて観客を導き惑わす道化師^{クラウン}。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3084u/>

ルイン一座へようこそ！

2011年7月13日03時31分発行